
書 評・紹 介

衣笠 智子 著

『少子高齢化と農業および経済発展—世代重複モデルを用いた 理論的計量的研究』

勁草書房, 2024年1月, 200ページ

本書は、「はしがき」に記されているように、異なる年代の経済主体が同時に存在する世代重複モデルを基礎に、一般均衡的成長会計分析モデルを応用し、年齢構成や寿命の変化が貯蓄・経済成長・農業に与える影響を理論的に考察するものである。書名が示すとおり、人口と経済の関係を対象とした理論的・計量的研究の専門書である。人口変化と農業の関係を踏まえた経済発展の研究は、著者の恩師である山口三十四の一連の業績に基づくものであり、その成果は国内外で高い評価を受けてきた。本書は、それらを踏まえつつ著者自身が独自に発展させた研究を体系化するとともに、英語論文として公表されることが多かった山口の研究を日本語で一冊にまとめて紹介している点に、大きな意義がある。

本書は、第Ⅰ～Ⅲ部の全9章および付録から構成される。第Ⅰ部「人口と農業および経済の理論的研究」、第Ⅱ部「人口と経済成長に関する計量的研究」、第Ⅲ部「少子高齢化時代の農業と経済」と構成され、とくに第Ⅱ部以降は著者が独自に展開した論文を中心にまとめられている。各章の概要は「はしがき」に整理されており、勁草書房のHPで公開されているので参照されたい¹⁾。各章の末尾には「おわりに」として要約が付され、数式や経済学に必ずしも精通していない読者にとっても理解しやすいよう配慮されている。想定読者は学部ゼミ生や大学院生以上であり、教科書的な利用も想定されているようである。

本書はマクロ経済の計量分析に立脚した専門書である。そのため、人口減少社会における具体的な政策提言や農業経営の方策を期待する読者にはやや難解に映るかもしれない。著者自身もさらなる計量的分析の必要性を指摘している。また、人口減少に対応する技術革新、外国人労働者の受け入れ、日本人の主食であるコメの政策など、より身近なテーマに関するコラムの記述などがあれば、読者層がさらに広がるとともに、より理解が深まるのではないかと感じた。

とはいえ、人口減少に直面する現代日本において、農業と経済成長の関係をマクロ経済の視点から理論的かつ計量的に検討し、日本語でわかりやすく提示した点は大いに評価できる。農業と人口の関係に関する研究は2010年代以降低調となっており、この状況下で既存研究を整理・体系化し、新たな研究の契機を与える可能性を有する本書の意義は極めて大きい。人口動向とマクロ経済の関係に関心を持つ研究者や学生に推奨したい一冊である。

(貴志匡博)

1) 勁草書房編集部ウェブサイト

https://keisobiblio.com/2024/02/06/atogakitachiyomi_shoushikoureikatonougyou/
(2025年8月19日閲覧)